

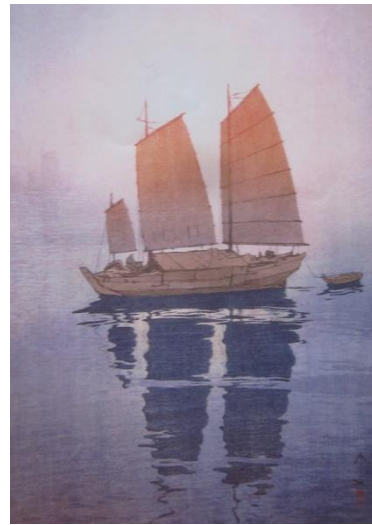
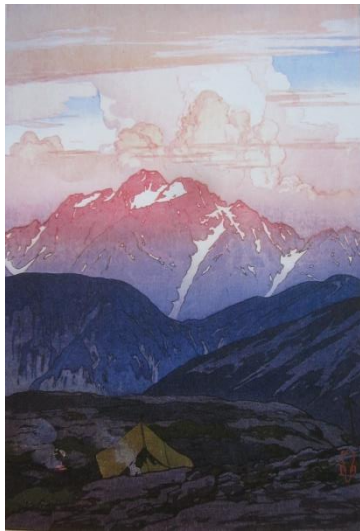
## 山と水の風景 生誕 140 年 「吉田博展」

東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 2017.07.08～08.27

「吉田博」(1876～1950)は、明治～昭和にかけて「絵の鬼」と呼ばれ、水彩、油彩、木版画を自然と写実の作風で世界に挑み続けた風景画家の第一人者であり、本展は生誕 140 年を記念する「回顧展」として、初期から晩年までの厳選された「200 点余」の作品が展示され、画伯の全貌とその魅力に迫るものである。

画伯が「絵の鬼」と呼ばれたのは、湿潤な日本の風景をみずみずしく描いた「水彩画」であり、雄大な自然美を登山家ならではの視点からとらえた「油彩画」であり、浮世絵依頼の技術を新解釈した「木版画」であった。

更に、画伯は、“*ダイアナ妃*や*フロイト* (精神医学者)も魅了”し、自然美をうたい多彩な風景画を好み、特に高山を愛し題材とする「山岳画家」として知られ、制作全体を貫く自然への真摯な眼差しと確かな技量に支えられた叙情豊かな作品は、国内外の人々を魅了し日本近代絵画史に大きな足跡を残している。



《日本アルプス十二題 剣山の朝》 (部分) 左 1926年 木版・紙

画伯が自らの監修による木版画を制作発表するようになって、最初の「シリーズ版画集」で、「剣山」は立山連峰の一角の「剣岳」のことで、高山の夜と朝と昼が同居する、夜明けの特別な一瞬はなんともすがすがしい雄大な風景で、彼の数多くの木版画作品中でも一、二を争う人気作品とされている。

《瀬戸内海集 帆船朝》 (部分) 右 1926年 木版・紙

一見水彩画のように見えるが実は手術用メスを使って彫った「木版画」で、太陽の動きに伴い刻々と表情を変える「海の姿」を、繊細な色彩を何度も摺重ねることで表現することで、同じ構図が全く違った印象を与えている。